

「 災害から学ぶこと 」

山口県 周南市立秋月中学校 3年 木村 優里

今年7月6日、大雨警報が出され放課後の部活動は中止となり帰宅を急いだ。雨水は坂道を川のように流れ、溝には雨水が吹き上がっていた。傘をさしていたが大粒の雨で全身ずぶ濡れだった。大きな雨音にまじり、雷鳴も鳴り響いた。仕事を終えて帰宅した母は、車のタイヤが半分浸かるほど道路が冠水していて怖かったと言った。夕食には家族全員がそろい安心した。夜には西日本各地の大雨特別警報がニュース速報で繰り返し流され、携帯電話の災害情報が鳴り続けた。今までの大雨とは違うと感じていた。

一夜明け、テレビに映る映像に驚いた。大量の土砂や大きな岩が家を飲み込み、木が貫通していた。車は土砂で流され、ひっくり返り、ぺちゃんこにつぶされていた。川ではないところを泥水が勢いよく流れていた。多くの家や車が水没し、人々が救助を待っていた。信じられない光景が映し出されていた。まさかこんなに大きな被害になるなんて想像していなかった。西日本を襲った豪雨災害は、多くの地域で河川の氾濫や浸水害、土砂災害を起し、死者200人を超える被害となった。家屋、ライフラインの被害も甚大で、大きな爪痕を残した。私たちの近くでも土砂災害により、鉄道線路と道路が寸断され、日常生活に影響が出ていた。寝ていて土砂に押しつぶされる恐怖、あつという間に水が迫ってくる恐怖、急に息ができなくなるという恐怖は、経験していない私の想像をはるかに超えるものと思う。一瞬にしてすべてが崩れていき、逆らえない膨大な力が大切なものすべてを奪った。

今回、大雨特別警報が11府県に出されていた。これは大雨で数十年に一度の重大な災害が起きる恐れがある場合に最大級の警戒を呼び掛けるものであり、命を守る行動が求められている。ここ数年の間に「数十年に一度の……」という言葉をよく耳にしている。めったに起こらないという意味に聞こえるが、最近頻度が増えているように思う。2011年の紀伊水害の教訓からこの大雨特別警報が導入されるようになったが、このような大雨が毎年のように起こるようになってきたようである。「地球温暖化」の影響もあり気温や海面水温が高いことが大雨を増加させているようだ。

気象予報の技術進歩で雨雲の動きや降雨量予想の精度が上がっているということもあり、時間とともに警戒レベルの変化が伝えられている。しかし、降雨量だけでは被害の危険を推定できず、その土地の地形や地質、周辺の環境により被害の出る危険度が違ってくると考えられる。自然災害による被害を予測したものがハザードマップである。大雨による土砂災害や洪水被害のハザードマップは、今回の豪雨災害でも一致していたといわれている。各自治体で様々な災害に対して作成されており、自分の家や学校、家族の生活範囲の危険度を把握しておく必要がある。私の家は山に近く、土砂災害に関しては心配していた。今回も家族で土砂災害の危険はないか確認したが、家が巻き込まれるかどうかだけでなく、帰宅経路、避難経路の確認も必要だと思った。自分のところは大丈夫だろうという過信が避難開始を遅らせたといわれており、自分たちに起こることとして行動しなければならぬ。土砂災害を起しやすい地域や河川の周囲は、より早めに避難開始するように自治体によって独自の基準を決めていくことが必要だと思う。

また、避難においては、自分で判断して移動できるかどうかということも重要である。避難が必要だとわかっていても、自分で移動することができない高齢者や障害のある方がいるかもしれない。自分で判断できない、または情報を受け取れない方もいるかもしれないということである。家族や地域の方々の協力で周囲に住んでいる方の状況を把握し、一緒に避難することが必要だと思う。

今回の大雨は過去最大級のものであったが、今後も同じような大雨の可能性はある。大雨の頻度は増えており、災害の再発防止が重要となる。地形、地質による土砂災害の危険性はある程度予測でき、砂防ダムなどの建設や補強工事に、迅速に対応していく必要がある。

自然の力の前では人間は無力である。過去の災害から学んだことを生かして、これからくる未知の自然の力の前でも災害が起こらないよう、できる限りの準備をしていくことが大事だと思った。

平成 30 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）